

4. バリアフリー施策への参加の方法と意識に関する研究

Citizen's participation and attitude in barrier-free policy

東京大学工学部都市工学科 70140 岡 遼太

This research aims to examine the consciousness and the participation of the citizen to the barrier free policy on Tsuzuki ward in Yokohama city. There are several ways to let citizen participate in the barrier-free policy such as “Kakiko-map”, workshops and leaflets. I tried to clarify differences between them through the comparison of comments gathered by each method with others. Also I had an interview survey to reinforce the research. In conclusion I realize again that comments gathered by workshops include that by other methods.

1. 研究の背景と目的

近年の高齢化により、高齢者等の交通弱者の活動機会を確保し、生活を快適にすることの重要性が大きくなっている。また、バリアフリー新法が成立するなど、バリアフリーに対する社会的な関心が高まっている。こうした中、バリアフリー施策に対する市民参加が必要との認識に基づき、自治体ごとに様々な取り組みがなされている。この研究では、現在バリアフリー基本構想策定が進行中である神奈川県横浜市都筑区を題材にして、バリアフリー施策への参加の方法とそれに伴う意見や意見表明主体の属性の違い、及び意見表明主体の意識の違いについて調査することを目的とする。

2. 研究の方法

2-1 横浜市における基本構想策定経緯

横浜市では市内をいくつかの地区にわけ、そのうちの数地区は既に基本構想が策定済みである。その策定経緯を大まかに述べる。

地区内有志者や有識者、区や市の関係者を含めた基本構想策定検討部会が設置され、主としてその検討部会によって基本構想策定に関する事項が決定される。この中で、「交通バリアフリー基本構想」について対象とする「重点整備地区」のエリア、および対象とする経路について、おおまかな案が完成した時点で市民参加のワークショ

ップを行い、市民の意見や要望を募っている。その上で、得られた意見を反映させつつ最終的な基本構想策定を行っている。また、基本構想策定素案ができた段階で、市民意見募集を行い、素案に対する意見や要望を募り、民意を反映している。

2-2 研究対象

研究対象とした都築区タウンセンター地区は、横浜市営地下鉄のセンター北駅、センター南駅周辺と、両駅を結ぶ区間に存在する「みなきたワーク」を含み、区役所や大規模商業施設が集積していることで特定経路が指定しやすいこともあり、バリアフリー基本構想策定の対象地域として指定され、現在策定が進行中である。

ここで行われている市民意見調査を基にして、市民参加の方法と意識に関する研究を行う。

都築区タウンセンター地区では、2008年10月9日に前述のワークショップが開催され、その場で得られた知見、及び他の手段で集められた意見を比較するとともに、新規にインタビューを実施し、現在行われている3つの意見集約方法との比較を通じて、研究を行うこととする。

3. 意見集約方法の分析

3-1 意見の集め方

都築区で選択されている市民意見募集の方法は以下のとおりである。

- ・検討部会におけるワークショップ

『まちあるき点検ワークショップ』では、参加者をあらかじめ決められたルートに沿って、班別に点検まちあるきを行い、事前に与えられたバリアフリーチェックポイントを基に気になった点、問題だと思われる点、改善が必要な点、良いと思った点などについて班員で意見を発表、共有したのち、ワークショップ全体で班ごとの意見を共有した。また、参加者は市民団体の方々や、様々な身体的特徴を持っている人が集まりやすい場であり、社会一般における人間の構成とは異なったメンバー構成になることに留意する必要があると思われる。

・市民意見募集チラシ

市民意見募集チラシは、対象区域の地図と意見を書き込む欄を備えた用紙を各施設に設置し、その返信によって意見を募集するものである。チラシにより得られた意見の特徴は、中高年層の女性の返信が多く、ゆえに子供や子育てに関する意見が多く寄せられていること、ワークショップに比べて匿名性は高いが、カキコまっぷに比べると、意見の出所に信頼がおける。

・カキコまっぷ

『カキコまっぷ』とは、インターネット上で対象地域の地図を表示し、その地図上で改善点、意見がある地点をクリックしてコメントを書き込むことで意見を閲覧者やシステム管理者と共有できるシステムである。横浜市では、バリアフリー基本構想を策定する段階でこのシステムを導入して市民の意見を集める一助としている。

『カキコまっぷ』に寄せられる意見の特徴は、地点の情報が含まれるため、具体的な情報になりやすいこと、意見に対してスレッドという形でツリーが作成されるため、意見に対する意見や返信などが書き込めること、インターネット及びキーボードという媒体が関連しているためか、書き込みの意見の分量が多くなりやすいことがある。

一方、その匿名性から情報の正確さに問題があると考えられる。

3-2 意見の類型化

次に、寄せられた意見の類型化を行う。

ワークショップ：事前知識を与えられ、点検を経た後意見提出する。能動的出席である。専門家とともに点検を行うため、具体的かつ身体障がい即した意見が提出されやすい。対面調査である。
カキコまっぷ：事前知識を与えられずに、過去の経験を元に意見提出する。能動的書き込みである。インターネットを通じて、都合のいい時に書き込める。ワークショップと比較して、事前知識を提示されない分、日頃感じている問題点が表明されやすい。非対面調査である。

チラシ：事前知識を与えられずに、過去の経験を元に意見提出する。チラシを設置場所から自主的に取得し、意見を表明する場合は、能動的意見表明である。チラシを配布されて、意見を表明する場合は受動的意見表明であるとも言える。都合のいい時に記入できる。カキコまっぷと似た意見になるが、チラシの設置場所や配布場所を絞ることで、意見を得る対象を絞ることができる。非対面調査である。

表 1 意見集約方法の特徴

手法	事前知識	能動/受動	参加主体	対面/非対面
ワークショップ	提示される	能動的	選別される	対面
チラシ	提示されない	場合による	選別されうる	非対面
カキコまっぷ	提示されない	能動的	選別されない	非対面

意見の数が多かったワークショップとチラシに関する意見をイメージマップ化したものを図1・図2に示す。なお、イメージマップ化に際しては、アイデア整理や発想法などに用いられるKJ法の考え方を利用した。

一番意見が多かったワークショップにおける意見を基に、関連性が高い意見をまとめたエリアとして4つに分類した。

誘導エリア（上）：視覚障害者用ブロックの存在や材質、点字ブロックに関する意見、案内表示に関する意見。このエリアの意見の対象となっているのは、主要施設と交通施設とをつなぐ経路をバリアフリー化し、経路の存在を伝達するために必要な装置である。

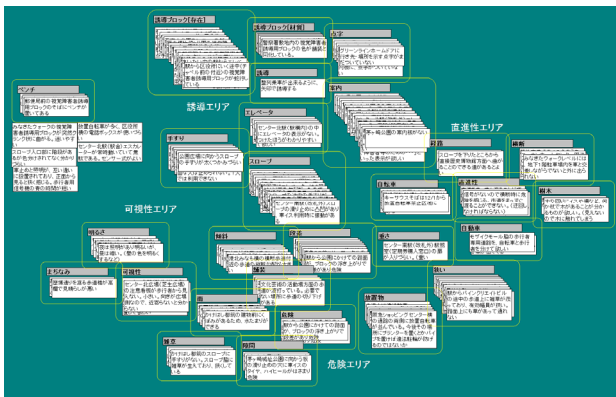


図1 ワークショップによる意見のイメージマップ

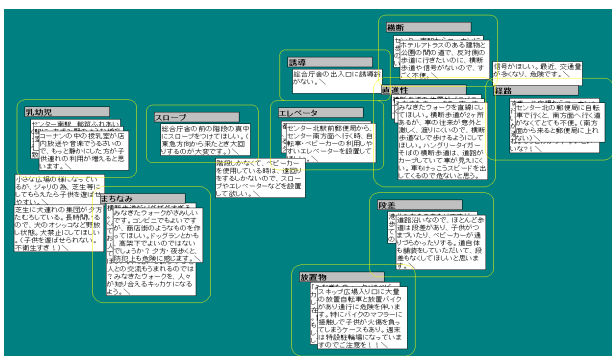


図2 チラシによる意見のイメージマップ

直進性エリア(右)：道路の直線性、車道との交差部に関する意見、自転車や樹木など、通行の妨げとなるうるものに関する意見。このエリアの意見の対象となっているのは、主要施設や交通施設の入り口や、それらをつなぐ経路に存在し、適切な通行を妨げるものである。

危険エリア(下)：道路の段差や傾斜、舗装などに関する意見、放置物など、通行する際危険を感じることにに関する意見。このエリアの意見の対象となっているのは、経路の物理的条件である。

可視性エリア(左)：建物内の明るさや、施設の発見しやすさ、視界の確保などに関する意見。このエリアの意見の対象となっているのは、街なみの明るさや施設の視界の開け方など、ソフトの部分も含む条件である。

上述の4エリアに分けて意見を考えたとき、ワークショップで寄せられた意見と比較してチラシで寄せられた意見との相違点は以下の部分である。

- ・ チラシにおける意見では、誘導エリアの意見がほとんど寄せられていない。特に、誘導ブロックや点字ブロックに対する意見は寄せられていなかった。一方、
- ・ 直進性エリアの意見は多く寄せられている。特に、横断歩道に関する意見が多く寄せられている。
- ・ ベンチに関する意見はワークショップでのみ寄せられ、子供の安全や授乳室の設置など、子供に関する意見はチラシでのみ寄せられていた。

4. インタビュー

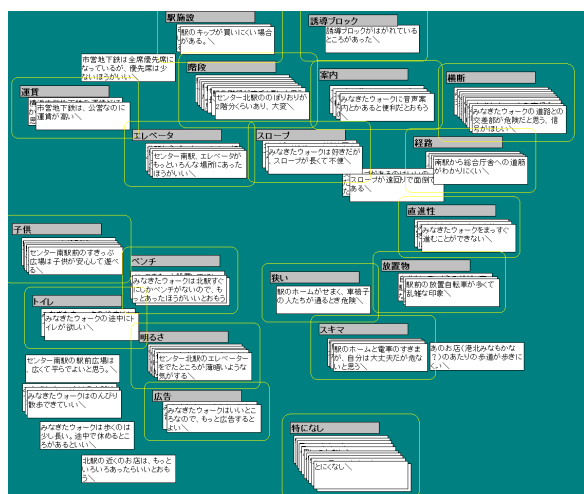
上に述べた意見集約方法では、積極的にバリアフリーに関する意見を寄せようとする人で、かつ意見を寄せる方法を知っている人の意見が集約されている。一方、積極的にバリアフリーに関する意見を寄せようとしない人や、意見の寄せ方を知らない人の意見に重要なものが含まれていないかを確かめるため、対象区域の路上において、一般市民を対象にインタビュー調査を実施した。以下にその結果を示す。

表2は、アンケートで調査した被調査者の年代と、その好む意見表明方法の関係を表したものである。これから、比較的若い世代はインターネットによる意見表明を好み、高齢世代はインタビューによる意見表明を好むことが見て取れる。また、インタビューによって寄せられた意見は、他の意見集約方法と比してより普段利用する頻度の高い施設に関するものが多くなる傾向があった。

表2 年代と好まれる意見表明方法の関係

	インターネット	チラシ	インタビュー	なんでもよい
10代	2	1	1	
20代	<u>11</u>	1	1	4
30代	<u>8</u>	3	<u>6</u>	4
40代	7	2	3	5
50代	2	1	2	2
60代	1	3	<u>8</u>	4

また、チラシやワークショップと同様に作成したイメージマップを図3に示す。



5. 結論

まず、ほとんど全ての意見について、ワークショップのイメージマップが他のイメージマップを包含していることがわかる。

ワークショップに参加する人の多様性、及びそこで検討されているバリアフリー上の問題点の妥当性、及びワークショップで得られた意見を市民の意見の代表としてバリアフリー基本構想へ反映させることの有効性を示していると言える。

これは、ワークショップが様々な身体的障がいを持っているひとを集め、その人たちが使いやすいと感じる施設や経路は、全てのひとにとって使いやすいはずであるというユニバーサルデザインの考え方を、裏付けているともいえるのではないだろうか。

一方で、インタビューによって寄せられた意見の中で、興味深い特徴を示していたのは、次の事項である。それは、調査をするにあたり、インタビューに協力はしてくれたのであるが、意見を特に表明しなかった人々の存在である。

すなわち、「参加する意思はあるが、参加方法がわからない」「参加する意思はあるが、意見保持の方法がわからない」「表明したい意見があるが、参加方法がわからない」人々の意見の内容と、彼らが望む意見表明方法が明らかになったことである。

全体のまとめとして、専門家や意識の高い人で

構成されているワークショップで寄せられた意見が、一般の人々の意見を包含している度合いが強く、ワークショップで意見を募集し、基本構想を策定することに十分な意味を見出せた一方で、必要があつてさらに広く一般から意見を募集する際に、上で挙げた2種類の人々から意見を募集しやすい環境をつくる、すなわち参加の仕方を広く周知する、またバリアフリーに関する意識を高める事などにより、各人が意見を持ちやすい環境を整えることが必要となることを明らかにした。そのためには、年代に応じた意見集約方法を考えることが有効だと考えられる。

6. まとめと課題

ワークショップにおいて寄せられる意見は、インタビューを含め他の意見収集方法によって寄せられた意見を包含しているため、ワークショップによって寄せられた意見に沿って市民参加の目的を達成し、バリアフリー基本構想策定に反映する検討部会の方法は、その妥当性を示したといえる。一方で、意見収集方法ごとにオリジナルな意見が寄せられている面もある。ゆえに、ワークショップの有効性を支持したとともに、より多くの意見を収集する際の手がかりを与えたと言える。一方、現在のワークショップで取り込めていないひとを参加させるための取り組みがもたらす労力と効果の関係を精査するためには、別な研究が必要であり、今後の課題である。

＜主な参考文献＞

- 横浜市 (2008)『横浜市 上大岡駅・港南中央駅周辺地区
バリアフリー基本構想』
交通エコロジーモビリティ財団(編集)(2005)『参加型福
祉の交通まちづくり』, 学芸出版社
石塚雅明(2004)『参加の「場」をデザインする』, 学芸出
版社
カキコまっふ (2009/3/10 現在)
カキコまっふ
<http://upmoon.t.u-tokyo.ac.jp/kakikodocs/>
横浜市のカキコまっふによる意見募集ページ
<http://upmoon.t.u-tokyo.ac.jp/kakiko2/KakikoMap>